太平洋戦争とは何だったのか

ハーバード大学教授　入江　昭

今回は、この一〇年、二〇年ばかり考えてきたことを中心にしながら、「太平洋戦争とは何だったのか」という今日のテーマについてまとめてみたい。

一　「歴史」の持つ三つの意味

太平洋戦争のように比較的最近の歴史を見る場合、歴史の意味に三つある。一つは、個人の回想・記憶。それは太平洋戦争で直接戦場で戦った記憶・思い出、英語で言うメモリー（memory）だが、そういった個人的な思い出も、厳然たる歴史であることに変わりはない。ある意味では、歴史といっても結局それは個人史の集大成だと言える。したがって、先ず第一に歴史というのは人間が作る以上、戦争で戦った人、あるいは空襲や占領を経験した人達、個人的なことを言えば私は一九三四年の生まれだから、戦争が始まったとき七才、終わったときには十一才、戦場には行ってないが、間接的には戦争を経験している。例えば、集団疎開、戦争中の教育、そして占領軍の思い出などである。

今年は五十周年記念というので、この二、三年まえからアメリカでも非常に多くの回想録が出版されている。例えば、日本軍の捕虜になったアメリカ人の体験を集め、ラフォート（Robert S. LaForte）が編集した *With Only the Will to Live*[1] という本のなかで、多くの人達は、捕虜になって生きるか死ぬかという分かれ目は、結局どんなことがあっても生きたいという意志の有無であったということを語っている。こういった体験や記憶、メモリー、それがひとつの歴史であることを否定することは出来ない。

それと同時に、個人個人の体験の寄せ集めだけではない、歴史というものもある。個人の体験、あるいは個人個人の感情とか見方とは別に、国としてひとつの過去観がある。それを英語では、パブリック・メモリー（public memory）と言うが、いわゆるパブリックな、公な記憶である。戦争の歴史ではないが、最近おもしろいと思った本に、インディアナ大学のジョン・ボドナー（John Bodnar）が書いた *Remaking America*[2] という本がある。この本が言おうとしていることは、人間は

一個の個性を持った個人である以上、それぞれの人達がプライベートなメモリーを持っている、と同時に国なら国、社会なら社会としてパブリックなメモリーがある。結局第二次世界大戦、ベトナム戦争、南北戦争など、過去アメリカが戦った戦争に対して、特定な、国としてあるいは社会としての見方がある。そういった見方がどこから出てくるかというと、それは別に民主主義といっても多数決で決めるわけではないから、政治指導者、名士とか言われる人達、あるいは学者などが集まって、ひとつのパブリック・メモリー、公の過去観を作っていく。そして、アメリカのように大きく多様な国が、国としてまとまっていくためには、パブリック・メモリーが必要不可欠だと言っている。

そのようなパブリック・メモリーがどのようにして作られたかということを調べたのがこの本だが、太平洋戦争に関するかぎりアメリカのパブリック・メモリーは比較的単純で、ドイツに対する戦争を併せて、アメリカとしては侵略戦争ではない、正当化し得る戦争であったという、つまりアジアにおいては中国、ヨーロッパにおいてはイギリスのように侵略の危機にあった国を助けにいった、あるいはもっと抽象化して世界に平和を蘇らせるため、あるいは正義のため、民主主義のために戦ったというコンセンサスが一応出来ているので、アメリカで太平洋戦争について一種のパブリック・メモリーを作るのはそれ程難しい仕事ではない。しかし、ベトナム戦争になると、いかにしてパブリック・メモリーを作っていくか、依然として問題があるのは衆知の通りだが、太平洋戦争については比較的はっきりしている。

例えば、ご承知のようにスミソニアン博物館における原爆投下に関する展示会が、最近問題になった。あれによっても分かるように、アメリカは正しい戦争をしたというパブリック・メモリーがあるから、原爆投下も含めてすべてを正当化しようとする意識が強い。だから一般に昔の歴史のことを知らない人でも、こういった国としての歴史観というものは身に付けているから、正義のための戦いに勝つためにいかなる手段を使っても正当化されるべきだという意識があり、したがって原爆を落としたということに対してもそれ程アメリカの意見が分かれているわけではない。このようなことから、国としての過去についてのはっきりした見解、その政治的な意義が分かる。

ところが、日本を見ると不戦決議問題が示しているように、太平洋戦争についてのパブリック・メモリーがない。それぞれのプライベート・メモリー（private memory）、個人としての体験・記憶はあるが、国としての歴史観はまだ固まっていないというのが日本の現状である。これはよく言われるように、ドイツとは非常に対照的で、ドイツには非常にはっきりとしたパブリック・メモリーがある。よくドイツと日本が比較されるが、根本的には必ずしもドイツ人の歴史観が正しくて日本人の歴史観が正しくないとか、戦争に対する反省の念が日本人は欠けているとかということではなく、個人のレベルではドイツ人も日本人もそれぞれ異なった過去観を持っている。ドイツにはっきりとしたパブリック・メモリーがあるから、ドイツのほうが平和愛好国民で、日本人はそうではないということにはならない。唯一の違いは、ドイツにははっきりとし

た国として姿勢があり、日本にはそれがないということである。

日本の現在のようにかなり意見が分かれているにもかかわらず、国としてひとつの姿勢を持つべきかどうか、非常に政治的な問題であるが、おそらくそこまで議論されるべきであろう。自民党と社会党の間で、両方の素案を突き合わせて、足して二で割るようなことでは、一般国民が受け入れるパブリック・メモリーになり得ないのではないか。本当に国としてはっきりとした見解を持つことが必要であれば、もっと国民の間で戦争についての議論がなされることが大切である。そうでなければ、日本としては戦争についての公の見解がないことになり、他の国からその点を批判されるであろうが、そこまで覚悟していかなければならない。

個人体験を通して見た歴史、国あるいは公の機関が作り上げた過去観のほかに、三つ目の歴史として、歴史家が政治的な思惑に囚われず、出来るだけ客観的に、史料を調べながら作り上げていく過去の記録がある。この三つの間に必ずしも相関関係があるとは限らず、ボドナーも言っているが、アメリカにおいてすら、個人の体験と公の歴史観との間にギャップが非常にある。公の歴史観と実際に歴史家が研究する歴史との間にもギャップはあるが、それは仕方がない。政府あるいは政治的指導者が作り上げた過去についてのイメージは、史実を正確に反映している場合もあり、必ずしもそうでない場合もある。そこは認識していく必要があると思うが、我々が研究者としてなさなければならないのは、個人の体験や公の見方がどうであれ、歴史家としては出来るだけ史料に忠実な過去を作り上げ、過去についての意味を問うていかなければならない。

スミソニアン博物館の例で言えば、アメリカの歴史家は、原爆投下に対して非常に懐疑的で、アメリカのパブリック・メモリーとの間に大きなギャップがある。今年のように五十周年ということになると、必ずそのギャップが政治問題化してくるが、学者の影響力は微弱で、一般の議会とか世論は耳を貸さない。パブリック・メモリーと学問としての歴史の間のギャップを痛感させられるが、それにもかかわらず長い目で見れば、客観的な歴史が作り上げられるのが好ましい状態である。

二　太平洋戦争の意味—太平洋戦争史観の変化を回顧して—

それでは私自身がひとりの歴史学者として考えていることはどういうことか、そして太平洋戦争についての意義を考える場合、学問的にどのようなことが言えるのか。私自身この二十年ばかり何冊か太平洋戦争について著作を発表してきたが、必ずしも解釈の点で一致しているとは限らないので、今まで発表してきた著書を通して、太平洋戦争についてどのようなことを言おうとしたのかを先ず最初に話したい。

私は、一九七八年に『日米戦争』(3)という本を出版したが、それは、日米の二国に焦点を絞って、太平洋戦争とはどのような戦争であったのかを調べた本である。今読み直しておもしろいと思うのは、日本とアメリカの相違よりは相似点、換言すれば日本とアメリカが全く異質な国であったというよりは、むしろ日本とアメリカが似ていたということを強調している点である。単純化すれば、太平洋戦争は日本とアメリカとい

う二つの帝国主義の間の戦いであったと。日本も帝国主義的であったが、アメリカも帝国主義的であった。そこで帝国主義の本質にそれ程違いがなければ、それが日本であろうとアメリカであろうと求めるものは大体同じで、地域的覇権、海外市場、そして政治的な影響力を求めた。したがって両国は、究極的にはどこかで衝突する可能性があったかもしれないが、非常に似た点もある。例えば、その後第三世界と呼ばれることになった諸国に対する見方が意外に共通している。中国、東南アジアは主として市場、経済的な利害関係の立場から見られ、国際政治というものを見る場合にも、大国や経済先進国の支配する世界を考え、民族自決とかナショナリズムは、副次的な問題に過ぎなかった。これが論旨ですが、それは一九七〇年代的な発想だったといえる。つまり一九七〇年代は、現在に比べて遥かに日米関係も安定しており、したがって太平洋戦争は非常に不幸な戦いであり、決して不可欠な戦争ではなく、日本がすべて悪くアメリカがすべて正しかったのではないという、そういった見方がアメリカでも多かった。戦争は四年間続いただけで、又すぐこれまでの親善関係が回復し、一九七〇年代でも日米関係が非常にうまくいっていたという意識があったため、太平洋戦争というのは非常に不幸な一時期であったが、根本的には日米関係の性格を変えるものではなかった。

今でもこの見方がすべて間違っているとは思わないが、一九八七年に書いた *The Origins of the Second World War in Asia and the Pacific*[4] という本は、かなり違った見方をしている。最初の『日米戦争』から、約一〇年たっているが、その間に私自身の考えのみならず、日米関係や学会の風潮も変わってきた。この本は、最初の本に比べて、明らかに日本が間違ったという見方に立っている。日本は、ワシントン体制と言われる国際協調の枠組みのなかに留まらず、国際連盟脱退、東亜新秩序声明と国際秩序に挑戦していった。それが戦争に結び付いたのは、結局アメリカがワシントン体制の保護者として、最初からワシントン体制というひとつの国際秩序を維持していこうとしたからであり、衝突したのは当然であるというのが、論旨である。したがって、国際秩序を破壊したものとしての日本という主題が極めてはっきりと主張されている。それは私個人の見方の変化と同時に、やはり一九八〇年代に冷戦末期の「新国際秩序」ということが頻りに言われており、その問題意識を反映していたのかもしれない。執筆の動機は、国際秩序が破壊されたのはなぜかという意識にあり、国際秩序とそれをめぐる国際関係という見方は私が言い出したことではなく、昔から言われていることである。

最近キッシンジャー（Henry Kissinger）が、*Diplomacy*[5] という非常に評判のいい本を出版した。ご承知のようにキッシンジャーは、バランス・オブ・パワー（勢力均衡）の角度から国際関係の歴史を捉えるが、こうした考え方はこの本でも非常に鮮明である。そういった分析によれば、ワシントン体制とか、国際秩序に対する日本の挑戦という見方は副次的な現象で、国際秩序は軍事力の均衡によって成り立つのであるから、もともとワシントン体制は成り立たなかった。したがって、キッシンジャー的な考えから太平洋戦争を見れば、それは単に強大化しアジアを支配しようとした日本に対する、アメリカの軍事的な反撃であると考える。

そのように捉える歴史家は依然として多いが、私には単にバランス・オブ・パワーというレベルだけで国際関係史を理解するのは、どうも物足りない。

一九九三年に、*The Globalizing of America*[6]という一九一三年から四五年までのアメリカ外交を概説した本を出版した。この本で言おうとしているのは、アメリカが国際化していったということである。その根本にはアメリカの思想的な動きがある。特にアメリカ外交の思潮を考えた場合、ウィルソン大統領のウィルソン主義は無視できず、したがってそのような観点から見れば、日米戦争はもちろんある意味では力と力の衝突かもしれないが、根本的には思想的な対決だったんではないか。つまりアメリカはウィルソン的な民族自決とか民主主義といった考えをアジアにも適応しようとし、それに対し日本が反発し、アメリカによる思想的・文化的なアジア支配を防ごうとした。それでアジア主義、大東亜共栄圏といった考えを持ち出して、アメリカとは別の理念で日本外交を推進していった。したがって太平洋戦争というのは根本的には思想的な対立、あるいは文化的な対立であったというのがこの本の論旨である。国際関係における思想的・文化的な面に、以前から関心を持っていろいろ書いてきたが、最近特にその重要性というものを認識している。したがって、日本もアメリカもあまり違わない帝国主義国家だったという見方、あるいはワシントン体制という国際秩序に対する日本の挑戦という見方もあるが、やはり太平洋戦争の意味というものを考えるうえで、アメリカと日本の持っていた思想的・文化的な衝突まで考えていく必要がある。

第一次世界大戦後の日米関係は比較的円滑で、国際関係は少なくとも一九三〇年代半ばまでは安定していた。しかし、第一次世界大戦後の国際秩序は、それ以前の秩序と比べて大きな変化がある。それは、各国間の思想的あるいは文化的な繋がりの激増である。もちろんキッシンジャー的な発想で言えば、根本的なのはパワーで、文化は国際関係と全く関係ないことになる。ただ国際関係を見た場合、最初の個人的なメモリーの話ではないが、国際関係を形成するのは国家だけではない、国家のなかにいる市民であることを考えれば、やはり個人の見方とか姿勢ということまでも少なくとも考えるべきである。特に民主主義の国にあって市民の動向は無視し得ない。したがって一九二〇年代日米関係が比較的安定していたのは、個人のレベルでの繋がりや、緒についたばかりの留学生制度、交換教授制度などの文化的接触によるところがある。そして、アメリカ的生活様式や、自動車、ラジオ、電話、映画などの物質文明が日本に入ってきて、好むと好まざるとにかかわらず、日米間の距離が短くなりつつあった。

日本でもこうしたことが意識され、日本はアメリカナイズされ過ぎたと言う人がいた。そういった立場から言えば、太平洋戦争は、そのようにして繋がった日米文化の関係を断ち切ったわけである。当時日本の識者が書いた本を読むと、日本の戦争は「文化の戦い」であり、「思想戦」だと言っている。物質面のみならず、民主主義など思想面での過剰なアメリカナイズは、日本の精神的基盤を弱体化するので、アメリカ文化に

代わる新しい文化を創造しなければならず、それが日本の任務であると、彼等は主張していた。ところで、こういった見方は一時的な思い付きとか、プロパガンダに過ぎなかったとは思われない。やはり、これだけ多くの人達がそういったことを言ったということは、そこになにかひとつの信念があったのではないか。その信念というのは、「西洋文明」、特に「アメリカ文明」に代わる文化を日本も創り出さねばならない。そのための戦いが、「アジアの戦い」であり「アメリカに対する戦い」だという意識が強かった。したがって太平洋戦争も、ウィルソン主義によって代表されるようなアメリカ的な世界観と、そうではなかった日本との戦いであると言える。

同じことは、日中戦争についてもある程度言える。もちろん中国は中国なりの文化意識を持っており、思想も持っていた。ただし、日本の見方としては、中国自身も非常にアメリカナイズされ、蔣介石の国民党政権もアメリカの影響下に陥っている。そのために日本との戦いを続けており、それ故中国に対してもアメリカから離れて新しいアジアの文明というものを認識させなければならないという意見が高まってくる。最近出版した『日中関係　この百年』(7)のなかでも触れているが、日中戦争もやはりそのような思想的・文化的な面があったことを認識しないと、中国とアメリカとの結びつきというのは分からない。そのようなことを考えると、太平洋戦争とは何だったのかということを現在の段階で考える場合、文化的な面から見た太平洋戦争をもっと強調すべきである。

三　二〇世紀における太平洋戦争の意味

最後にもう少し幅を広げて、二〇世紀における太平洋戦争の意味は何かということを述べたい。二〇世紀も終焉に近づき、戦後五〇年経過した現段階で、今世紀を振り返ってみるとどのようなことが言えるのか。そして、そのようにして捉えられた二〇世紀のなかで、太平洋戦争がどのように意味付けされ得るか。二〇世紀というのは「戦争の世紀」だったとよく言われる。しかし二〇世紀が戦争の世紀だったから太平洋戦争も意味があるというのでは、ほとんど意味がない。むしろ、より掘り下げてみた二〇世紀の歴史というものがあり得るのではないか。キッシンジャーの発想法によれば、二〇世紀の歴史は一九世紀の歴史と比べて勢力均衡の崩れた世紀、したがって戦争が多発したのも、ある意味で無理もなかったということになる。しかし、二〇世紀は戦争の世紀だったかもしれないが、少なくとも第二次世界大戦以降世界大戦というのは起こっていない。その理由として、核兵器とか核抑止を考えなくてはならないが、そのように技術的なことだけで二〇世紀を見て、それで終わりだというのでは、あまりにもひとつのレベルでしか見ていないのではないか。

二〇世紀の歴史を現在の段階で振り返ってみると、ひとつ否定し難いのはアメリカの影響力である。「二〇世紀はアメリカの世紀である」とアメリカで言い出したのは『タイム』と『ライフ』の社長だったヘンリー・ルース（Henry Luce）だが(8)、それは一九四一年のことであった。丁度太平洋戦争勃発前夜に二〇世紀こそアメリカの世紀であると言った

わけだが、結局太平洋戦争の結果、アメリカは益々支配的な影響力を持つようになった。軍事的にも経済的にも文化的にもアメリカの勢力は絶大になったと言える。さらに、現在のようにアメリカの経済力が相対的に弱体化し、一方冷戦が終結しソ連との対決がなくなりアメリカも軍備を縮小する段階になっても、まだアメリカの政治的・思想的・文化的な影響力というのは衰えていない。したがって、二〇世紀初頭と現在とを比べて、ひとつの大きな違いがアメリカの影響力であるとすれば、二〇世紀はまさにアメリカが世界各地で絶大な影響力を発揮してきた、アメリカニゼーションというものが浸透していった世紀であると言える。

そのような観点からすれば、太平洋戦争の意味も、ひとつ分かってくる。すなわち、アメリカは自分たちの影響力、特に経済的あるいはウィルソン主義といった思想的な影響力をアジアにも浸透させようとした。日本はそれに反対して、それが最後特に一九四一年の日米交渉において、非常にはっきりと表れている。その後アメリカの原爆投下によって戦争が終わると、アメリカは唯一の核保有国として当分の間その勢力は絶大であった。それのみならず一番大切なのは、戦後アメリカの占領下で日本は、戦前以上に一層アメリカナイズされていった。結局第二次世界大戦はアメリカの影響力を世界に浸透させていく過程における一段階であった。日本人は敗戦後、アメリカの懸念に反してアメリカの影響力というものをすすんで受容してきた。それは単に日本が戦争に負けたからということだけでなく、戦前アメリカの影響力が既に日本国内に入っていたため、戦後受け入れやすかったのである。いずれにしても、二〇世紀の歴史のひとつのメインテーマが世界におけるアメリカの影響力の増大だとすれば、太平洋戦争もその枠組みのなかで捉えることが可能である。

アメリカの影響力の増大と同時に、もうひとつ二〇世紀の歴史を通じて考えられるのは、非西洋、その後第三世界と言われるようになった欧米以外の地域の台頭である。二〇世紀が開幕した時に、日露戦争での日本の勝利に象徴されるように、あるいは二〇世紀が終わりに近付く現在、次の大国は中国やインドなどアジアの国だと言われる程までに、アジアの国は力をつけてきた。アジアのみならず、中南米、中近東といった非西洋諸国の自信、経済的発展、あるいは政治的な隆盛も二〇世紀の歴史の大きな特色であったと言える。そうだとすれば、太平洋戦争もそれと結びつけて考えなければならない。この場合に一番問題になるのは、それでは二〇世紀のひとつの現象である第三世界の台頭を、太平洋戦争が促進したのか、それともそれとは逆行するものであったのかということである。これは議論の分かれるところである。太平洋戦争は「アジア解放の戦い」であったとよく日本で言われるが、その立場をとれば太平洋戦争は、第三世界の台頭を促進する戦いだったということになる。したがって、太平洋戦争を戦った日本の歴史的役割というのは、二〇世紀のひとつのテーマである非西洋世界の勃興を助ける歴史的な任務を担ったということになる。

一方、アジアの大部分の人達は、自分達は日本によって解放されたとは思っていない。結局彼等は自分達の解放を念願しており、太平洋戦争

はひとつの出発点になったとしても、それは必ずしも日本の政策の結果ではなく、自分達の努力や国際連合によるということになる。そこで意見が分かれるが、太平洋戦争と第三世界の勃興というものの結びつきを考えていくには、極めて実証的な研究がなされなければならない。マルティカルチュラリズム（multiculturalism）、「多文化主義」ということが今アメリカでよく言われている。それは、西洋文化だけではない多くの文化が世界にあり、多くの人種がいることを前提とした「文化的多様主義」と言っていい。そのマルティカルチュラリズムの発展と、第三世界の勃興は同じ現象を言っているのではないか。つまり、アメリカニゼーションがあると同時に、二〇世紀という世紀は、欧米以外の地における民族とか国家が躍進してきた世紀である。その場合に、日本の戦争遂行者が、どこまでこのことを意識してアジア及び世界において「多文化主義」を推進する方向に持ってこうとしたのか、そのことはさらに実証的に考えられなければならない課題である。

最初に書いた『日米戦争』で触れているが、一九四三年に大東亜会議が開催された。会議では意外なことに、文化交流が強調された。大東亜会議に出てきたアジアの指導者達は、日本占領下の指導者だから、どこまでその国の世論を反映していたかは別問題だが、少なくとも日本はひとつの意向、スローガンとしてアジア域内、さらには世界における文化交流の重要性を提唱している。結果的にそうなったとは言えないが、そのような考えが戦後更に文化交流の意識として繋がってきたとすれば、そういった意味で太平洋戦争の意味付けをすることも不可能ではない。日本はアメリカニゼーションに対抗しようとしたが、それに対抗するとすればまさにアジアの国とあるいは有色人種の人達と一緒になって、「多文化主義」で語る以外になかった。しかし、どこまでそれを意識してやっていこうとしたかは、疑問と思わざるを得ない。日本は戦争が終わったら、即座にアメリカの影響力を再受容するに至るが、日本が文化的多様性を深刻に受けとめて、非西洋の国として日本の外交政策を定義するようになったのはいつのことか。今もそうなっていないかもしれないが、少なくともこれは避けて通ることのできない課題である。

四　太平洋戦争五〇周年と日本の果たすべき役割

太平洋戦争をどう見るか、捉え方にはいくつかの方法がある。それは明らかだが、特に二〇世紀全体の歴史のなかにおける太平洋戦争を考えると、やはり文化的な視角を取り入れる必要がある。ひとつにアメリカの影響力の増大化があり、他方第三世界の勃興という現象があり、これらは今日まで繋がっているテーマである。果たしてこの二つが両立し得るものであるかどうかは、二〇世紀最後、あるいは二一世紀初頭の一大問題ではないか。世界がアメリカナイズされた方向に行くのか、それとも第三世界が自分達の発言力を増していく方向に行くのか、この二つが両立するのかどうか。太平洋戦争そのもの、そして太平洋戦争における日本あるいは一九三〇年代、四〇年代における日本の役割を考える場合、こうした枠組みから歴史を見ることが出来る。戦前の日本はアメリカの強い影響を受けていたが、同時に日本は紛れもなく非西洋のアジアの国

である。その意味で、日本の主体性の問題というか、アイデンティティーの問題とも関わってくる。

戦争の意義を考える場合、アメリカの影響力の増大というものに対して抵抗するのであれば、アジアの国と積極的な協力関係に入るべきであったかもしれない。逆にむしろ、アジア諸国の勢力の増大を恐れるのであれば、アメリカの影響力が一層強まる方向を選ぶべきであったかもしれない。あるいは、これを両立させる方向で、日本としても何等かの役割を果たすように努力すべきだったかもしれない。このように日本の選択には様々な可能性があった。かくして太平洋戦争の意味をここまで踏み込んで考えると、日本は当時の日本に与えられた重要な歴史上の役割、又太平洋戦争が何のための戦いだったのかということに対して明確な意識がなかったと言わざるを得ない。戦後五〇年になるが、その意味では太平洋戦争のときにあった問題はまだ続いていると言える。つまり、アメリカの影響力は一向に衰えず、他方非西洋の諸国も力をつけてきた。今後この両方が衝突しないようにするのが、人類にとって一番好ましい方向である。日本としても、今後の外交政策を模索する場合、どうしてもそういったことに留意しなくてはならないのである。

（平成七年六月五日戦史部において行われた講演の抄録である。文責・庄司潤一郎）

註

（1）Robert S. LaForte, et al., eds., *With Only* the *Will to Live: Accounts of Americans in Japanese Prison Camps, 1942-45* (Wilmington, DE: Scholarly Res. Inc., 1994).

（2）John Bodnar, *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century* (Princeton: Princeton University Press, 1992).

日本語版は、ジョン・E・ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ—歴史の記憶と愛国主義—』野村達朗訳（青木書店、一九九七年）。

（3）入江昭『日米戦争』（中央公論社、一九七八年）

英語版は、Akira Iriye, *Power and Culture: The Japanese-American War, 1941-1945* (Cambridge: Harvard University Press, 1981).

（4）Akira Iriye, *The Origins of the Second World War in Asia and the Pacific* (London: Longman, 1987).

日本語版は、入江昭『太平洋戦争の起源』篠原初枝訳（東大出版会、一九九一年）。

（5）Henry Kissinger, *Diplomacy* (New York: Simon & Schuster, 1994).

日本語版は、ヘンリー・A・キッシンジャー『外交』（上・下）岡崎久彦監訳（日本経済新聞社、一九九六年）。

（6）Akira Iriye, *The Cambridge History of American Foreign Relations, Volume Ⅲ: The Globalizing of America, 1913-1945* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).

（7）Akira Iriye, *China and Japan in the Global Setting* (Cambridge: Harvard University Press, 1992).

日本語版は、『日中関係　この百年』興梠一郎訳（岩波書店、一九九五年）。

（8）Henry Luce, *The American Century* (New York: Farrar, 1941). これは、最初一九四一年二月一八日の『ライフ』誌上に発表された論文を、まとめたものである。

◎講師紹介◎

一九三四年一〇月、東京に生まれる。ハーバード大学において博士号取得。シカゴ大学などをへて、一九八九年よりハーバード大学歴史学部教授。日本人として初めて、アメリカ歴史学会会長を歴任。

［著書］『米中関係のイメージ』、『日本の外交』、『日米戦争』、『太平洋戦争の起源』、『日中関係　この百年』、『権力政治を超えて』など英文を含め多数。